

主権者の怒り

安保斗争の記録

編集・日本ジャーナリスト会議

50円



安保反対斗争は、恐らく数百年のちにも、民族の歴史の大事件として、私たちの子孫によって語りつがれることでしよう。

わずか半年ほどまえ、私ども、ニュースの仕事をしている連中は「条約などというものは、国民の日常の損得に関係が薄いから、反対運動は大きくならない」といつていたものです。いま、私どもは不明を恥じています。津々浦々の、あらゆる職業の人々の無数の努力がつみ重なって、日本史上はじめての、そして世界をゆるがすほどの大きな民衆の闘いを、日本の国民はやりました。「権力に対して卑屈である」と自他ともに認めていた日本国民が、国の将来、世界の平和、正義のためには驚くほどの勇氣と情熱を發揮し、献身を恐れないことが証明されました。

樺美智子さんの死を頂点として、劇的なものも、それほど劇的にみえないものも、ともかく涙のであるような情景が、この半年の間に、何百何千とみられました。警官隊と闘った人、議事堂のまわりを怒りをこめて歩いた人、首を覚悟にストをした人ばかりではありません。家庭や仕事を離れられなかった人々も、これまでとはちがった眼で、新聞を読み、テレビをみ、ラジオを聞いて、隣りの人と国の運命について語り合いました。

私たちは国の主人公であることを、いまこそ本当に知りました。岸の流れをくむ一部の人は、新条約は成立したといい、岸のあとに同じような池田内閣をつくりました。しかし、私たち、国民は、もう決して負けてはいないでしょう。



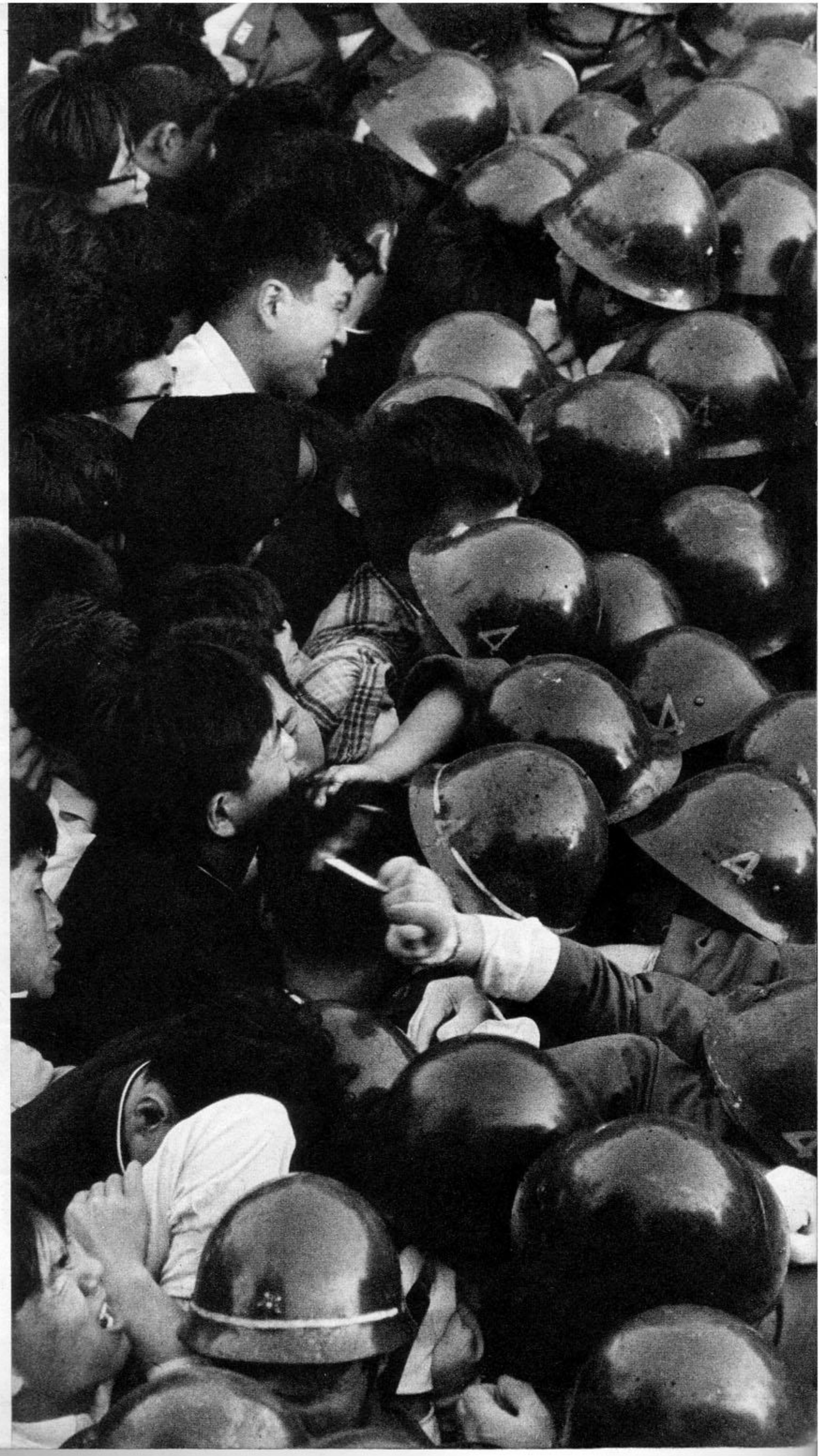


この議場には野党の議員はいない。国会の中は、議員でなく警官隊が支配していた。議長席にはい上った清瀬議長の顔には血の気もない。あまり乱暴な採決のやり方を見て、途中で退席した自民党議員もいた。このとき、国会は国民のものではなかった—五月十九日—





とにかく新安保は通過したと岸首相一派は乾杯した。だがそのとき、国民は国会を包囲していた。もはや政府には何の権威もなかった。





電車は動かず、郵便もとまった。多くの市民が労働者と共に夜を明かした。日本ではじめてゼネストが成功した。



演劇人の中には「先のり」という言葉がある。先のりは劇団が公演する前に現地にのりこんでキップ売りやその他の準備をする。私たちはモスクワ芸術座やジャン・ルイ・バローの先のりなら歓迎するが、アメリカ帝国主義の先のりは歓迎したくない。(俳優・宇野重吉)

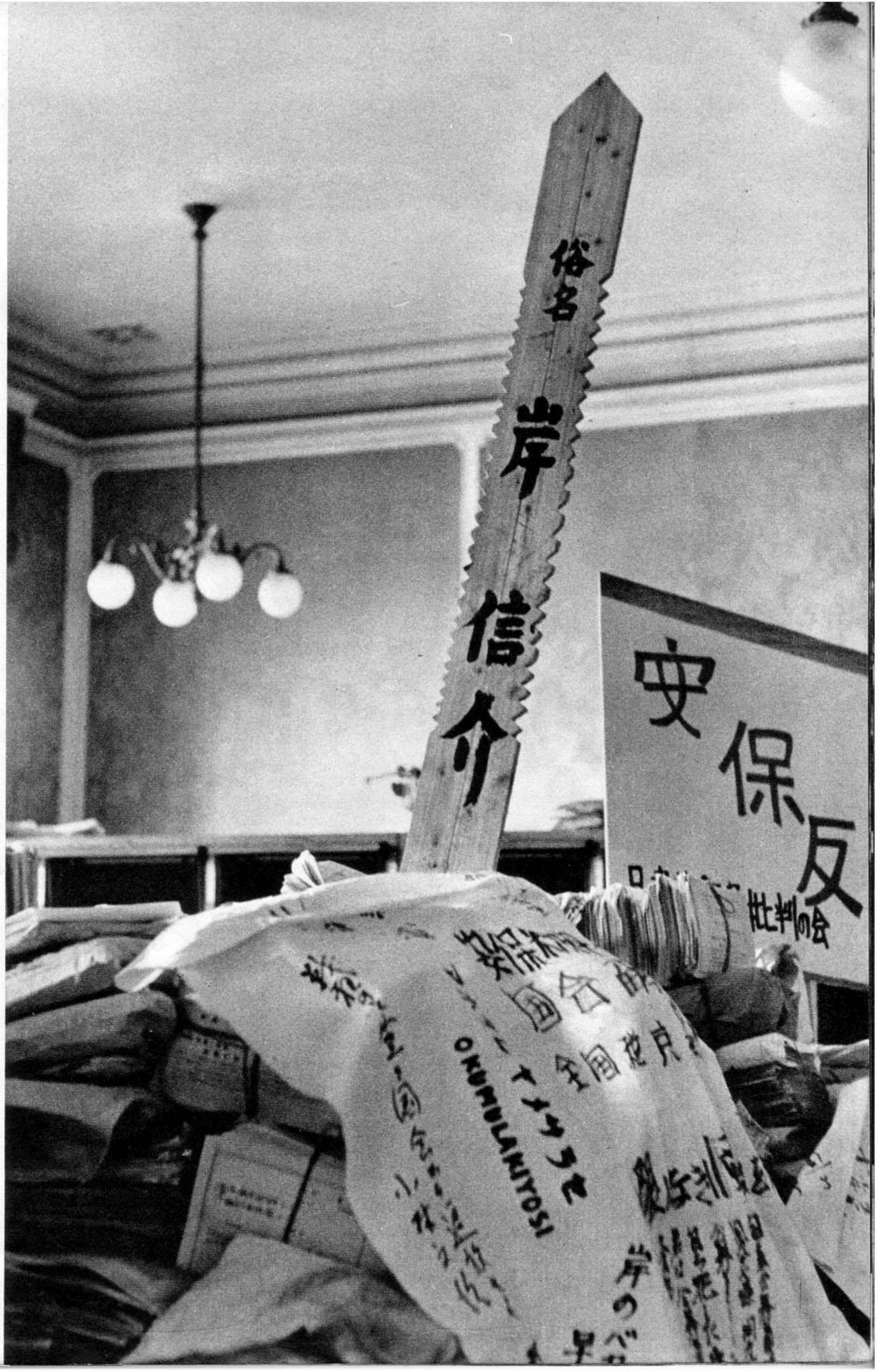




北からも南からも、人びとはいたたまれぬ気持ちで東京に集って
きた。岸や自民のやることを黙って許すことはできなかった。

デモ隊がどんな武器をもっていたのか。国を憂う
心と心の結び合いの他には、生ま身の体があっただけだ。
権力者の方が暴力で国民の口をふさごうとしているのだ。





請願書一千万通ノ怒りをこめて名前を書きこんだ津々浦々の主権者を思え。

1958年9月11日

藤山外相、ワシントンでダレス米国務長官と
会談。安保条約改定交渉開始の共同声明

10月4日

東京で安保改定交渉の会談はじまる

10月13日

警職法反対国民会議発足。警職法闘争で大衆
勝つ

1959年3月28日

安保改定阻止国民会議結成

3月30日

東京地裁伊達裁判長「米軍駐留は憲法違反」
と判決

4月15日

第一次安保阻止全国統一行動

6月25日

第三次全国統一行動。炭労、ストに突入。東
京で二万六〇〇〇人が中央大会(日比谷)に
参加

8月6日

第五次全国統一行動。全港湾労組時限スト。
総評傘下各労組は職場大会。東京で五万人の
集会(後楽園)など。全国で四〇〇万人が統
一行動に参加

9月15日

フルシチョフ・ソ連首相ワシントン着。27日
「国際問題の解決は力によらず、平和的方法
で」と声明

9月16日

石橋湛山元首相、北京で周恩来中国総理と会
談。20日共同声明に調印、「政治と経済は切離

街々で反対署名運動がはじまる



歴史の瞬間に立つて

松山善三

(シナリオ作家)

ついにその瞬間は来た。

有権者の三分の一を越えるという二千万人余の新安保反対請願も
日本歴史はじまって以来という空前の大衆行動も、「十九日午前0
時」という「時」をおしとどめることはできなかった。

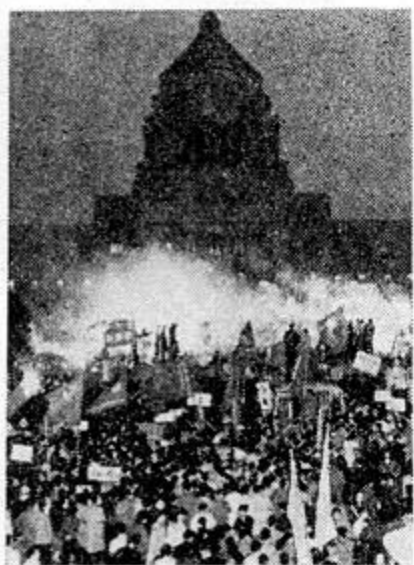
携帯ラジオから流れる「新安保自然承認」というニュースを、私
は首相官邸の前に集結したすわりこみのデモ隊の中で聞いた。一
瞬、挫折感にも似た空虚な空気が、人々の顔をかすめたが、次の瞬
間、デモ隊の人々は、立ち上がっていた。フラッシュとフライヤー
に浮かび上がるデモ隊の人々の顔には、憎しみと怒りが、さらにこ
の暴挙をけって許すまじという決意の色が赤々と燃えていた。

宣伝カーの上に立った社会党横路節雄氏が、「自民党は安保が成
立したといっているが、これは無効です。これから議員面会所の前
で、安保無効宣言を発表しますから、移動してください」と、声を
からして叫ぶ。しかしデモ隊は動こうともしない。

真白なホータイを頭にまいた全学連の京大北小路中執が、マイク
を加藤委員長代理に渡す。二人の顔は蒼白だ。加藤委員長代理が、
トラックの下からさし出された学友からのアンブル―ブドウ糖で
もあろうか、ストローですい上げ、「学友諸君！学友諸君」と語
りかけようとした時、議員面会所の方から北大の旗を先頭に各地の
大学の旗をおしたた学生の一隊が「岸を」「倒せ」「岸を」「倒せ」
と叫びながら、怒濤のごとく首相官邸へ向かって流れて来た。

汗とほこりにまみれた学生たちの顔、顔、顔が私の目の前を洪水の
ように流れて行く。「岸を」「倒せ」「岸を」「倒せ」というシュプレヒコ
ールは、時に「岸を」「殺せ」「岸を」「殺せ」という憎悪の言葉に置き
かえられたが、しかし、その言葉は、さらに後続する「岸を」「倒せ」
「岸を」「倒せ」という統一の中で、すぐに消えていった。

せぬ」と強調
 10月9日 文化人有志の「安保批判の会」発足
 10月17日 学者の集り「安保問題研究会」が藤山外相あて公開質問状を出す
 10月25日 西尾派、社会民主クラブを結成
 11月25日 衆院外務委員会が政府・自民党が南ベトナム賠償協定の審議を打ち切ろうとしたため混乱。26日暁の本会議で賠償協定可決
 11月27日 国民会議第八次統一行動。三万人のデモ隊国会を包囲。政府、自民党の暴挙に怒った大衆が国会構内に突入、抗議集会を開く。この日より安保反対闘争は全国民の課題となる
 12月10日 第九次統一行動。炭労大手一四社二十四時間スト、国鉄労組の職場大会など
 12月14日 北朝鮮への帰国第一船、新潟から出航
 12月16日 最高裁、砂川事件の「伊達判決」を破棄
 1960年1月16日 岸首相ら安保調印全権団、六〇〇〇人の警官隊と七〇〇人の右翼暴力団に守られて羽田を出発。渡米阻止のため前夜から空港に集まっていた学生七〇〇人警官隊によって弾圧され、七十七人が逮捕される
 1月19日



11月27日 デモ隊国会構内に突入

「岸を」「倒せ」は「安保」「反対」「反対」にうけつがれ、それはさらに「国会」「解散」「国会」「解散」の合唱にうけつがれる。まるでそれは美しい、荘重な音楽を聞くように、私の皮膚をつきぬけて、身をふるわすような感動となって、私の心につきさってきた。

榎さんの死から

その日の朝、全学連の抗議集会が日比谷の野外音楽堂で開かれていた。「学生虐殺抗議、岸打倒、安保粉砕」のスローガンの下に、二メートル四方くらいにひきのばされた当日の現場写真と、セーターに身をつんだ榎美智子さんの写真が壇上から、集合した学生諸君を見下ろすようにしてさがっていた。

あいさつに立った榎美智子さんの父は、マイクの前に立ってしばらく絶句した。異様な、しかし悲しみにつつまれた一瞬がすぎた。

「私もその日は学者、研究者の抗議集会に出席していました。民主主義は、もはや国会の中ではなく、わずかに抗議集会やデモの中に燃えのこっていると信じたから」

「娘は死の前日まで、ほとんど夜も眠らないようでした。デモから帰ってくると、卒論の準備におそくまで机に向かい、翌朝またデモに出かけて行くような毎日でした。明治維新史講座が娘の机の上のこざれていました」

とトットツと語って、こみ上げる涙をぬぐった。そしてまた、「娘の死が民主主義と平和を守る、なにほどの力となり得るならば、父としての悲しみは薄らぐだろう」と。

その言葉には真実があふれ出ていた。しかし、美智子さんの死が平和を守る大きな力になり得たとしても、父として、母としての榎先生夫妻の悲しみは、永遠に深く胸をかきむしられるような思いとなつて決して消えないであろう。それは、セーターに身をつんだ可憐な少女のつぶらなひとみが、はつきりと物語っている。一ファシストに牛耳られたおろかな不安な日々の政治下になかったならば彼女の未来には、恋や結婚や育児という、輝かしい、そして美しい

ワシントンで新安保条約と新協定、附属文書が調印される

1月27日

グロムイコ党書「日米軍事同盟の締結はハボマイ、シコタンの日本への譲渡を不可能にする」と通告

2月1日

第三十四通常国会再開。11日衆院に日米安全保障等特別委員会を設く

2月25日

第十二次統一行動。官公労五割休暇闘争

2月26日

フルシチョフ、インドネシア議会で演説し、「日米新安保は日本自体にとって危険なトバク行為だ」と言明

3月19日

第十三次統一行動。全国六〇〇カ所で集会。

五〇〇万人が参加

3月23日

社会党大会、浅沼氏を委員長に選出

3月28日

争議中の三井三池で、第一組員久保清氏が暴力団員によって刺殺される

4月10日

周恩来中国首相、人民代表大会の席上で「新安保は日本人民に災いをもたらし、中国、ソ連、東南ア諸国民の安全を脅かす」と言明

4月15日～26日

第十五次統一行動。合化労連二四時間スト。

16日東京で三〇〇〇人の婦人が都心デモ。法律家、学者、宗教家の国会請願続々。26日東



新安保の調印式で語るアイクと岸

人間の生活があり得たはずだ。

「ふたたびあやまちはくりかえしません」と国民は原爆の地広島に誓った。しかし、私たちはふたたびあやまちはくりかえしたようだ。岸首相を政権の座に送ったことである。そして、未来ある一少女の無残な死を招いた。

私たちは一体、だれがだれに何を誓ったのか。戦争責任の追及が政界におけるほど、安易に見すごされている世界を私は知らない。今日の不幸は、岸首相を政権の座に送ったその日から予測されていたはずである。しかし、美智子さんの霊は、榎先生にあてられた次のような一国民の投書によって慰められるだろう。

「私は今日まで保守党支持者であったが、岸内閣のような国民を裏切る政党には今後絶対に投票しない」

そしてその手紙の中に百円札が一枚おりこまれていたという。

学生の歌声に 若き友よ手をのべよ

輝く太陽青空を ふたたび戦火のみだすな……

高らかな学生たちの合唱を背に、私は音楽堂の外へ出た。公園には地方代表がそれぞれ旗を中心にしてぞくぞくと集結していた。

不気味な南平台

その不安なニュースは午後二時ごろから人々の口から口へと伝わっていった。「南平台に焼き打ちをかける」というのである。女子学生の死が全学連の学生たちを異常に興奮させているというのである。私は南平台へ車を走らせた。道ゆく人々の足取りはせわしく、その顔には不安な政局へのあせりがみえるようだ。岸首相はデモを一部の反対分子ときめつけ、「野球場や映画館は満員だ」とうそぶいたが、映画館の中でニュースに岸首相が登場した時、「バカ野郎、ひっこめ！」と観客が叫び、その叫びに拍手のわく現実を、ご存じだろうか。私は映画の仕事にたずさわって十余年、このような罵声を、幸運にも一度も耳にしたことはなかった。

南平台の公邸付近は不安なニュースとは逆に、ひっそりと静まりかえっていた。隣の私邸の門とヘイには有刺鉄線が縦横にはりめぐ

京で一〇万人が国会に請願

26日李承晩は南朝鮮人民の決起に抗し切れず大統領辞任を声明

5月9日

第十六次統一行動始まる。

中国の首都北京では、日米軍事同盟条約に反対する日本人民の闘争を支援して一〇〇万人の大集会。

12日総評、中立労連傘下の労働者四六〇万人が職場集会。群馬県では商店がスト。14日東京では六万人が雨中の国会デモ

5月17日

米スパイ機(U2)のソ連領空侵犯が原因となつてパリ首脳会談決裂す

5月18日

安保批判の会代表一〇人は岸首相と会見し、安保批准とりやめを要求。国内情勢は緊迫

5月19日

午後10時25分、衆院安保特別委員会が自民党委員、新安保を強行採決。同11時7分、警官五〇〇人院内に入り、社会党議員をゴボウ抜き。11時48分衛視に囲まれて清瀬議長、本会議場議長席につく。会期五十日延長を可決。5分間で散会。院外では雨の中を駆けつけたデモ隊三万人が国会を包囲。反対闘争高潮す

5月20日

午前0時6分、自民党単独で衆院本会議開会新安保は討論なしで可決。わずか12分間。社会、民社、共産の三党と石橋、三木、河野、松村等の自民党反主流派議員は採決に加わらず。野党三派はただちに議決の無効、国会解散要求の声明を発表。

デモ隊一万人は午前4時まで国会を包囲してすわり込み、抗議を続ける。国会は完全なマヒ状態におちいる。

朝から国民会議の統一行動。労働者、学生、市民一〇万人が国会、首相官邸に抗議デモ

5月21日

岸首相は官邸で社会党代表と会見。内閣総辞職、解散要求を拒絶。

抗議デモはひろがり、永田町の首相官邸、南

平台の首相公邸はデモ隊にとり巻かれる。総数五万。アメリカ大使館にもデモ

5月22日

首相官邸の石べいに高さ3メートルの鉄条網張られる

東京都立大の竹内好教授は「岸内閣の公務員としてとどまり得ない」と辞意を表明

5月24日

社会党浅沼委員長、マッカーサー米大使と会見、アイク訪日延期を要望。両者卓を叩いて激論

5月26日

自民党と同志会だけで参院会期延長を議決

一七万人の国会請願デモ。岸首相は午後2時から10時すぎまで院内にクギづけ

群馬、茨城で三度目の商店スト

5月27日

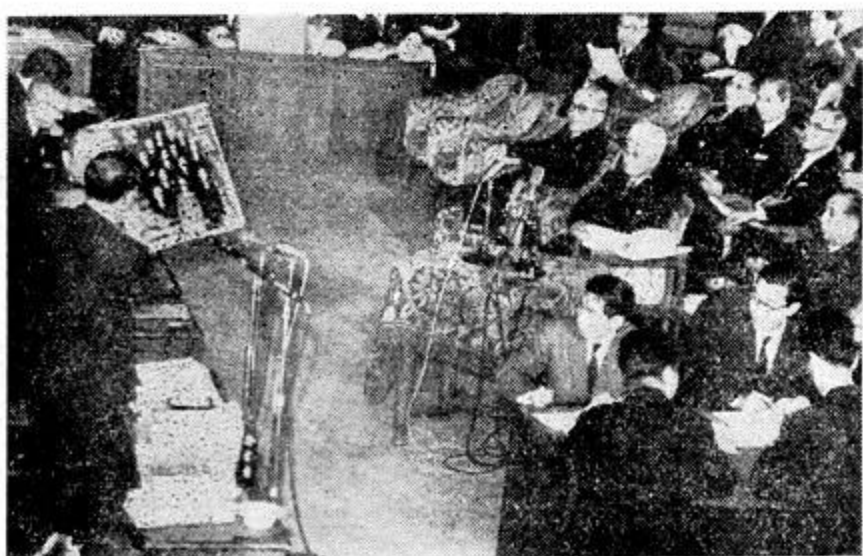
トルコ陸軍、クーデターを起す

5月30日

若い日本の会三〇〇名が集会、「安保議決を無効にせよ」と声明。各界の声明あいつぐ



北京で日本人民支援の百万人集会



社党議員、安保委で政府を迫る

らされ、門のすきまからのぞくと、内部はがっしりと、これも縦横にくみ合わされた丸太でさええられている。公邸の門をはいると、異様な光景に驚く。五十人ほどの警官が、テントの下の荒むしろの上に河岸のまぐろのようにごろごろとならんでねむっている。警官たちの顔には疲労のあぶら汗がうかんでいる。警備の警官にふみあらされたのであろう、緑であるべき庭一面の芝生は茶かっ色に枯れていた。

公邸の裏にまわると、作戦本部といわれるテントがあり、大きなテーブルを中にして、十人ほどの警官が鋭い目で何台もの電話からはいる情報を聞いていた。

その時、私の目にちりと赤いものがうつった。木立の向こうに配置されていたのは一台の消防自動車である。水をはった真新しいバケツが四個、窓の下におかれていた。そのブリキの光が妙に印象的であった。不安なニュースは、事前に用意された消防自動車から生じたものではないだろうか。

ワレ友ヲウシナウ

「1960.6.15. ワレ友ヲウシナウ」

樺美智子さんが殺された国会南通用門の門柱に、この文句が石でこすって書かれていた。ここにも二寸五分角の丸太が縦横に組み合わされ、その丸太に有刺鉄線がまきつけられている。有刺鉄線の上に、だれがそなえたのか、たくさんの花束がむぎんにつき刺してある。あたかも、血をながした幾人かの学友を象徴するかのよう。その花束の花は、一様にしおれて、首うなだれている。通用門の前の焼香台には、ひきもきらぬデモの人々が焼香と黙禱を捧げて、立ち去ろうとしない。「焼香のすんだ方は、あとの人に道をあけてください」と整理員がメガホンで叫ぶ。

すでに国会周辺はもちろん、チャペルセンター前、人事院わきまで、Y字形の道にはデモ隊の人々がぎっしりと押しかけて身動きもできない。

林立するプラカードと赤旗をぬって、ライトブルーの旗を先頭に

午後五時、喪章をつけた東大合同慰霊祭参加者の行進が国会正門前を通って南通用門前に着く。約三百人の東大教授団、そのあとに約七千人の学生、そして一般市民が続いている。一人一人が一本ずつのカーネーションやマーガレットの花を手にはしている。

手から手へ、二本、三本と集められて前に送られる花は、次第に大きな花束となって、焼香台の前につき上げられる。社会党議員にまもられた樺美智子夫妻が、すずらんの花束を有刺鉄線につきさして黙禱をささげる。わっとカメラマンが夫妻をとりまく。私のところからは、もう夫妻の姿は見えない。身動きのできない学生たちはその場にすわりこみをはじめる。

官邸前は、新聞社、ラジオ、テレビ会社の車が一列に並び、各社のテレビカメラが、ものものしくやぐらの上のにのっている。官邸の門柱やヘイの上には、鉄カプト姿のカメラマンがひしめいている。四機のヘリコプターは、交互に音高く国会の頭上をとんで離れようとはしない。屋台のうどんや、ジュース、あんぱん、焼きいもなどを売る、その日ぐらしの商人が右往左往している。すわりこみのデモ隊の間をぬって、アイスクリーム屋が「安保反対 エーアイス」と、アイスクリームを売って歩く。なんとという貧しい国だろう、貧しい国のあまりにも貧しい政治がうんだ、これが唯一の笑いであった。

うつぼつたる怒り

「岸君、再び戦場で会おうぜ」

次第にせまってくる夕やみの中に、ひとときわ高く一枚のプラカードがかかげられている。あと五時間――。

国の長い運命を決定する午前0時が刻々と近づいてくる。不思議なことに、五月十九日以来一カ月の間、常に有刺鉄線の向こうに腕をくんでいた警官隊の隊列は、今日は見えない。警官隊は建物のかげにひっそりと集まって立っている。デモ隊を刺激するなという配慮であろうか。あるいは、やるならやってみろ、という高姿勢なのか。そのころ、また一つ不安なニュースが口から口へと伝えられた。

6月4日

6・4スト、国民的支持のもと成功裡に決行される。国電は始発から午前7時までとまる。旅客、貨車の運休は全国で七五九、遅延は一六七本。全商連加盟の商店二万軒も時限または全日閉店スト。この日全国で五六〇万が集会、デモに参加

6月7日

米上院外交委員会が安保審議を開始。

東久邇、片山、石橋の三元首相は岸首相に即時退陣を勧告

6月8日

総評臨時大会、満場一致でアイク訪日反対決議

6月10日

米大統領新聞秘書ハガチー来日。羽田空港出口でデモ隊にとりまかれ、1時間10分立往生、ついにヘリコプターで脱出

6月11日

第十八次統一行動。全国三五〇カ所、二〇〇万人が参加。東京では二三十万人が国会デモ

6月13日

岸・西尾会談。民社はアイク歓迎に転換。議決休会案話題になる。東京教育大、法政大自治会、日本鋼管川崎労組がハガチー事件で不法捜索さる

6月14日

全労、アイク歓迎を声明。新聞も同調。

総評は羽田沿道デモ中止を社、共産党に申し入れ

6月15日

6・15スト。6・4ストを上回る。全国で五八〇万人が統一行動に参加。

午後から夕方にかけて国会請願デモ。一万人が国会周辺を埋める。

午後5時10分頃、国会第二通用門付近で右翼一二人がデモ隊になぐりこむ。

午後5時45分頃、全学連のデモ隊七〇〇〇人、国会南通用門を開き、同7時国会構内に入る。警官隊に襲われ負傷者数百名。この時

東京大学学生権美智子さんが殺され、全国民の憤激はその極に達す

6月16日

政府は臨時閣議でアイク訪日延期を決定。政府大動揺。

国民会議の抗議デモ一〇万人。各大学抗議集会。首相官邸、国会周辺に権さんの死をいた

み、岸内閣に抗議するデモ隊相続く。国内情勢騒然を極む

6月17日

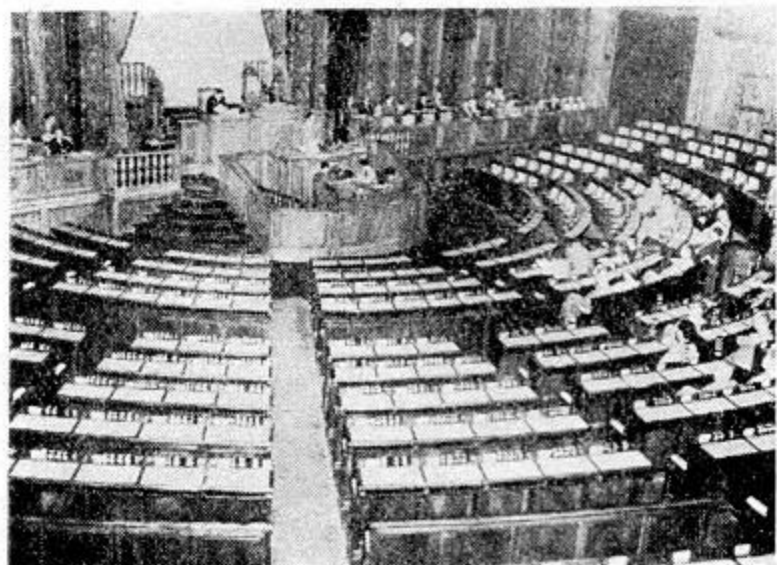
社会党河上丈太郎顧問、国会請願受付所で刺さる

6月18日

権美智子さんの東大合同慰霊祭。国会デモは、労働者、学生、一般市民、地方代表など空前の規模三三万人に達し、その一部は夜を徹して国会周辺に坐りこむ。岸首相デモ隊に包囲されて官邸に泊る

6月19日

午前0時過ぎ、参院で議決を経ないまま新安保「自然承認」。国民会議は直ちに「この条約は認めない」と声明



空疎な参議院議場で関係法案も成立

市ヶ谷、習志野、宇都宮、練馬の自衛隊員に外出禁止令が出たというのである。官邸内では閣僚会議が開かれ、自衛隊の「治安出動」が話題になっているというのだ。デモ隊の「院内突入」や「焼き打ち」にそなえ、議員会館では、「重要書類」を運び出したとか。国会議事堂内は鉄の防火トビラがおろされ、官邸内では消火栓につないだホースが、赤いジュウタンの上をはい、いつでも放水できるようになっているという。

配慮か挑発か、それを断定できるものはだれ一人としていない。空前の大衆動員の成果を決定するものは、個人の責任と良識の上にかかっていた。

学生も必死であった。教授も必死であった。各大学の教授団が、すわりこみの学生たちの間をぬって説得に奔走する。「国会や官邸へ乱入しても、安保阻止にもならなければ、岸を退陣させることもできない。それはむしろ右翼の登場をうながすだけだ。秩序正しく行動してほしい」と。

はじめて国会周辺のすさまじい光景を目にした教授の中には、うわずった声で学生たちに呼びかける姿もあった。はた目にはコッケイでも、しかし学生と教師の間には、人間として通い合う血のあたたかさのこざれている。学生たちの笑いは、教場での笑いのように、明るく余裕があった。

ついに午前0時

一方、三宅坂の国立劇場建設予定地を埋めつくした、公労協、民間労組は、デモ指揮班の「流れ解散」に反対して、一時は険悪な様相を呈した。くらやみの中に、うつぼつたる怒りとエネルギーがみなぎっていた。それはもはや、エネルギーという物理的な力ではなく、恐ろしいほど緊迫した精神を感じさせる。「流れ解散絶対反対!」「すわり込め!」とヤミの中で叫ぶ一つの声は、アジヤ、野次などというものではない。それは心の叫びを伝えている。指揮班の命を待たずに、すでに先頭は出発した。私は不安になった。何事も起こらなければよいが。しかし、その不安

を消してくれたものは、国会正門前いっぱいすわりこんだ高校生グループと、自発的にすわりこんだ一般市民の姿であった。「ふたたび流血をくりかえさないために」私たちはここにすわった、と紅顔の少年はいう。まだ中学生だという娘をつれた一人の母は、「権美智子さんの死が他人事だと思えないものですから」という。

三十万人余にのぼる秩序整然たるデモは、このようにして行なわれた。「苦労さまです」「苦労さまです」とマイクを通じてよびかける社会党員よびかけは、もはや空虚なものになっていた。国民は自分たちのために戦っているのだ。一社会党や、共産党のために戦っているのでは、決してない。自分の生活を守るために、自分の足をふみ出したのだ。

そうした国民の不安をよそに、時は一分一分と過ぎてゆく。そして午前0時をむかえた。岸首相は、三十万、いや、二千万人近い人々の心の叫びをついに聞こうとしなかった。

携帯ラジオから流れる「新安保自然承認」のニュースは、黒雲のように、人々の頭上をおおった。

「もう一押しだったのに」とだれかがつぶやいた。はたしてそうだろうか。私たちは人間ではないものと戦っていたのではないだろうか。これほどまでの反対にあいながら、岸首相の手にのこったものは一体なんである。どのような約束手形が彼の手におちてくるというのだろうか。私は暗い空にむかって、ふるえるような思いで立っていた。

午前三時、私は家路についた。J紙の山本満氏からの手紙が一通、机の上で私を待っていてくれた。私はその手紙を読んだ。はじめて暖かいものが私の胸にこみ上げてきた。その一節をここにのせさせていたたく。

まあたらしい生命

——六月十五日夜、若ものたちの群れのなかにいて、わたしは、「子供の徴兵検査の日」という金子光晴の戦争中の詩を、しきりと思っておこしていた。「けずりたての板のようなまあたらしい裸で



アイク、前線台湾で蒋介石を激励



いま、いちばん大切なことは、一刻も迫及の手をゆるめないことです。(五月二十六日、安保批判の会)

6月20日

参院自民党は単独で本会議を開き、新安保関係諸法案を一挙に可決成立。無法の連続

6月22日

第十九次統一行動。6・22スト。総評、中労連の一一一単産、六二〇万人が早朝ゼネストに突入

6月23日

藤山外相、マッカーサー米大使、外相公邸で日米新安保批准書をひそかに交換。岸首相、臨時閣議で辞意を表明。樺美智子さんの国民葬行われる(日比谷)二万の労働者、学生、市民が参列

6月25日~7月2日

第二十次統一行動。25日大阪で二万五〇〇〇人が安保不承認決起大会に参加。7・2全国五〇カ所で「新安保不承認、国会即時解散、不当弾圧反対、新条約締結責任者の追放」をめぐり集会。参加者は東京の一五万人をはじめ全国で二〇〇万人

7月10日

神奈川県厚木でU2機追放国民大会が開かれ、厚木米空軍基地に抗議デモ。参加者二万人

7月14日

自民党大会で岸総裁辞任。池田勇人を総裁に選ぶ。首相官邸で岸首相、右翼暴漢に刺され負傷

7月19日

池田内閣成立



国民の眼をかすめて批准書の交換



岸首相、官邸を去らんとして刺さる

立っている」息子の若いいのちを、「喰い入るように眺め」ながら、詩人は、のしかかる権力の暴虐に憎しみをたぎらす。

その日、国会におしかけ、そして流血の犠牲をうけた学生たちは、みんな「けずりたての板のような」まっすぐで、感動的な若ものたちであった。未来をはらんで誇りを戦いとうとする、「まあたらしい」若ものたちであった。「エネルギー」などという物理的な力ではない、ひとりひとりが限りなくとおしまれなければならぬ若ものたちであった。

これらの翹望する未来を、失礼千万にも権力によって奪いとうとするものは、用いられる武器が鉄の警棒であろうと、あるいは「理論」と称する衰弱した観念であろうと、わたしたちは、若い友人らと、肩を組んで戦おう。そして、戦いに傷ついた友には、かれがふたたび「けずりたての板のよう」に大地にしっかりと立てるよう、父親や兄のごとくに助けよう。そのような行動を通じてわたしたちは、さいごまで若ものたちの誠実な友人でありつづけることを、かれらの「けずりたての板のようなまあたらしい」生命を熱烈に愛しつづけることを、かれらに保証し、そしてそれを、わたくしたち自身にもたしかめあうことができるだろう。犠牲者への救援を組織しよう。そして、たがいに裏切ることのない友情のしるしを、結び交わそう――。

ただ平和な生活を

最後にお断わりしておく。私は反米でもなければ、反ソでもない。とりわけ親米でもないが、親ソでもない。私が熱愛するものは、平和な私自身の生活であり、この私の生活をささえてくれる美しい社会である。

そしてまた、私は日本人であることの誇りと、日本人であることの喜びを、個人人の生活の中に反映してくれる、よりよき政治を念願する日本人である。なぜこのようなわかりきった断わり書きを書くかといえば、過日私はある知人から、「お前はいつから敵にまわったんだ」と詰問されたからである。(週刊朝日)35・7・3号)

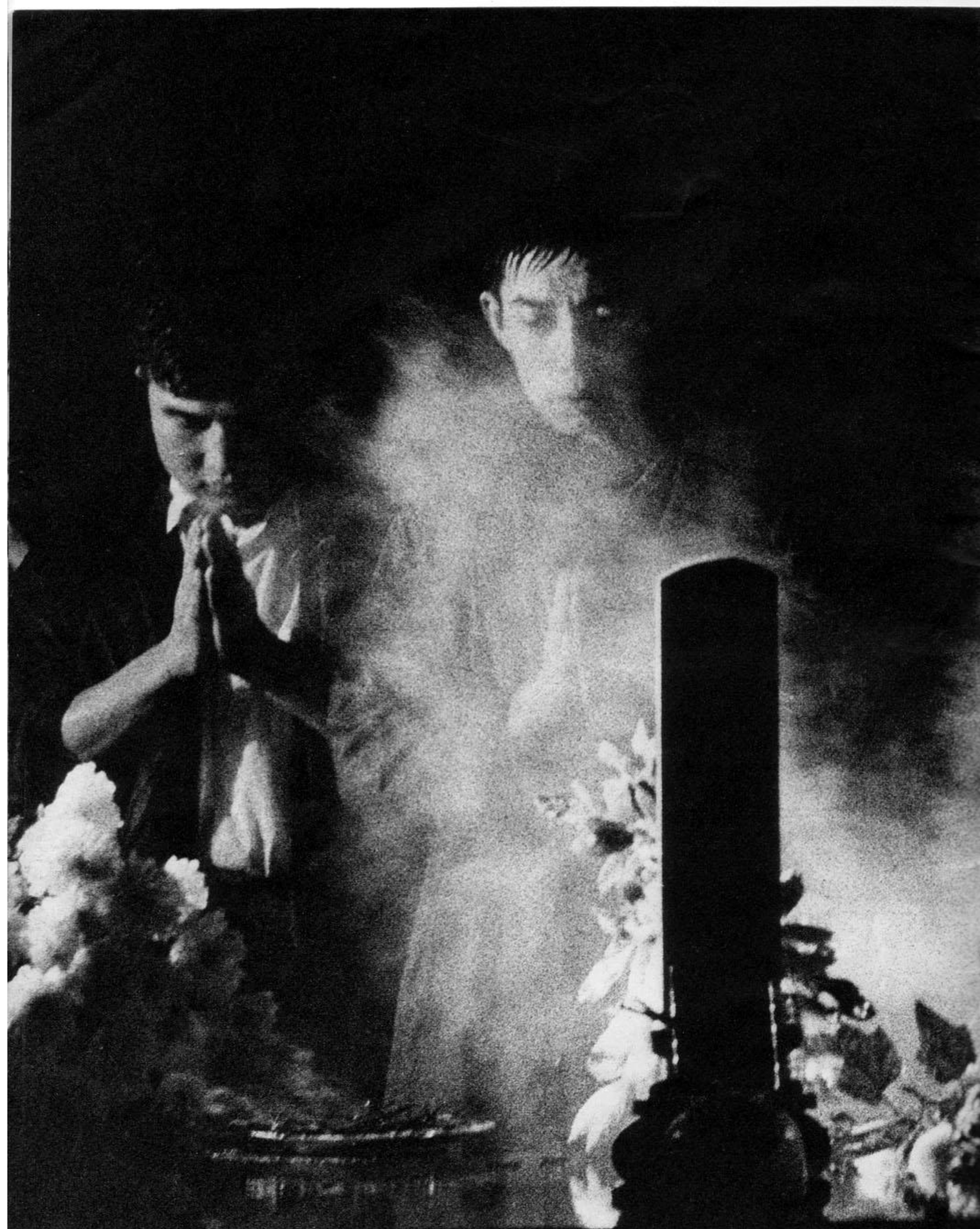


横なぐりに激しく降る雨。報道陣のフライヤーに彼らの青いヘルメットが、鈍く光る。警棒の下に政治があるか。



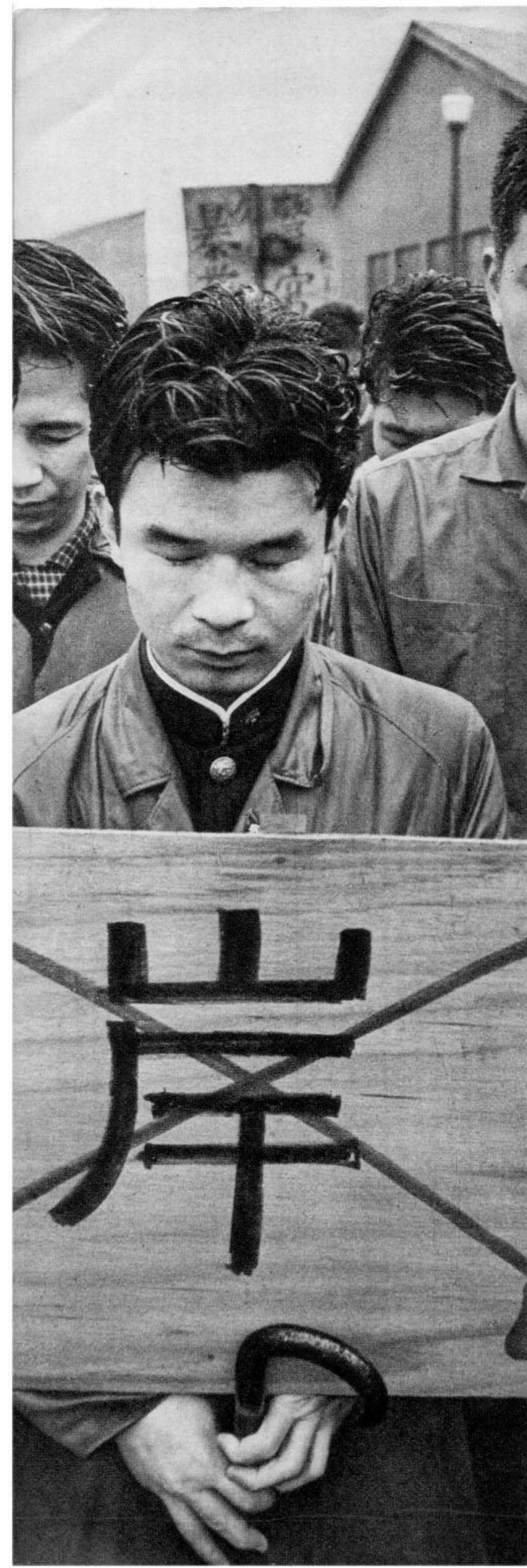
この暴力のまえて、個人はだれに、なにに助けをもとめたらよいのか。国民を保護しなければならない法が、国民を暴行するために利用されているときに。警官だから責任が軽いのではない。幾十倍も重いのだ。彼らを暴行傷害罪に問え。法の名のもとにおける不法——それこそが、ファシズムの正体だ。（東大助教授・日高六郎）





私たちは忘れない 君を斃した 黒い手の人々を 友よ！ みてい
たまえ 私たちは闘うだろう 友よ、みていたまえ ——
(この詩は六月十九日朝、樺美智子さん受難の地、南通用門横の有
刺鉄線の上に捧げられていた。——作者不明)





ニュースを聞いてから何も手につかず、泣き続けています。かけつけて助けてあげたかった。(詩人・深尾須磨子)

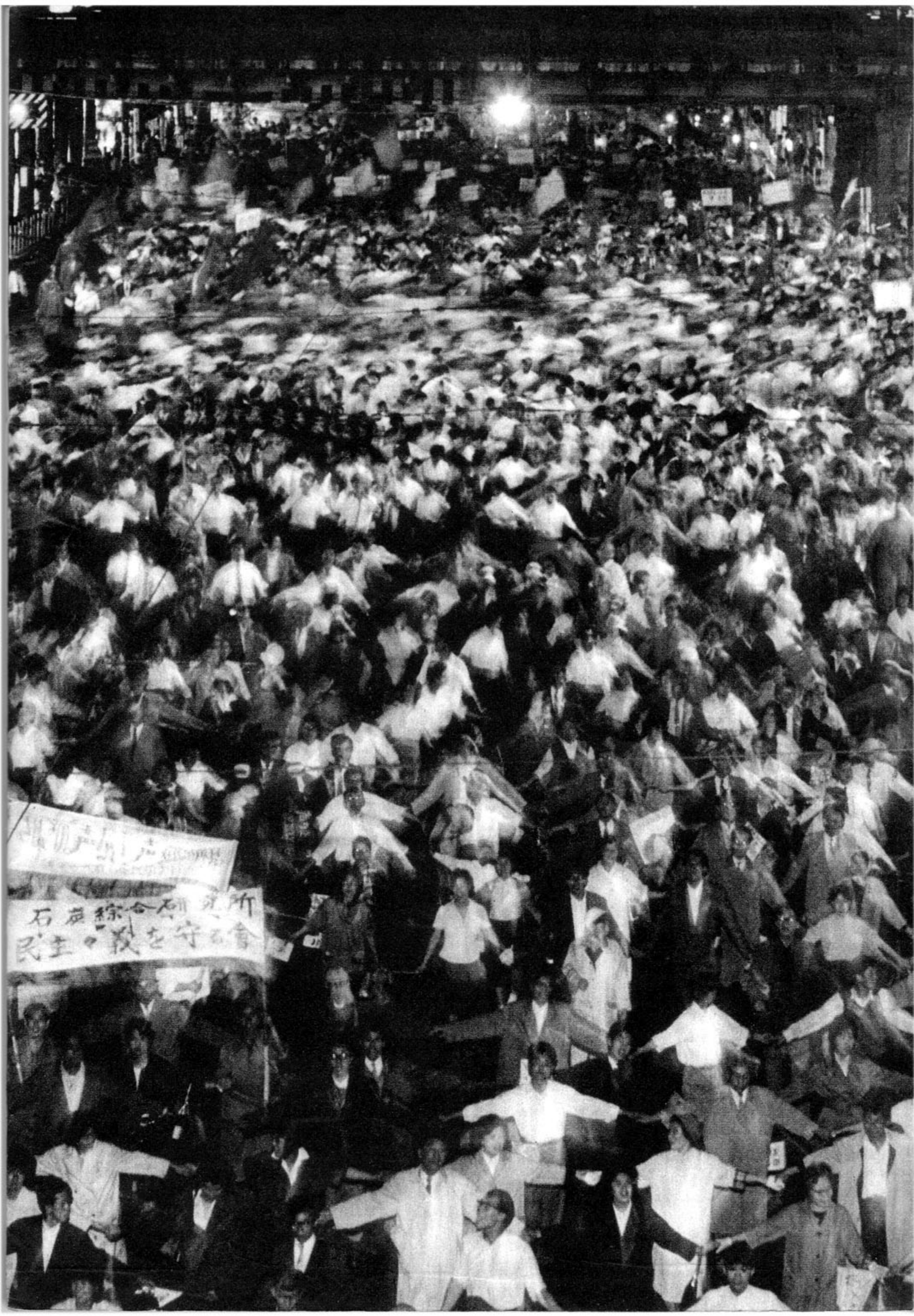


政府と自民党は卑怯な“自然承認”をねらった。憂国の大群衆は毎日のように国会周辺に集った。その数はいつも主催者の予想を上回った。



私たちは緊張の連続だった。夜も昼もなく国会のまわりに集り、デモリ、叫んだ。どの町でも村でも話し合い、署名を集めた。連帯の広さと底の深さに対しては自信ができた。国民は新安保条約を決して認めなかったし、こんども認めはしない。日本の民衆に民主主義は根づいた。この新しい感動を大切にし、この波をもっと大きくしよう。労働者は電車をとめることができた。日本の民衆は日本の政治を動かすことができた。いま感じている強い決意は、開けてきた明るい日本の将来への展望とつながる。ゆるぎない確信をもって、腰をすえ、顔を上げて、団結を堅めて、さらに斗いをつけよう。





写真撮影

濱谷 明浩
 東松 雄照
 渡部 浩吉
 川島 猛
 高原 一
 高野 重
 長田 康
 内田 久
 小西 兵衛
 木村 伊三
 佐藤 省三
 平塚 晴康
 共同フォトサービス
 U P I - サン
 一九六〇・八・一五
 東京都中央区京橋二ノ三
 田ロビル内
 日本ジャーナリスト会議
 凸版印刷板橋工場